

であった。母親の平均年齢は 36.4 歳、最高年齢は 51 歳で最低年齢は 26 歳であった。

母親の気分状態(POMS 短縮版)の平均得点は、緊張－不安は 5.29、抑うつ－落込みは 2.90、怒り－敵意は 5.85、活気は 7.60、疲労は 6.77、混乱は 5.69 であった。祖父母の平均年齢は、64.8 歳、最高年齢は 82 歳、最低年齢は 52 歳であった。そのうち、祖父は、28 名(16.5%)、平均年齢は 67.4 歳、祖母は、142 名(83.5%)、平均年齢は 64.3 歳であった。健康状の問題を自覚している祖父母は 8.8%であった。

祖父母の孫家族との居住形態は、同居 25 名(14.7%)、敷地内同居 20 名(11.8%)、同町内 33 名(19.4%)、同市内 45 名(26.5%)、同県内 27 名(15.9%)、県外(日帰り可)14 名(8.2%)、県外(日帰り不可)6 名(3.5%)であった。祖父母による子育て支援の頻度は、「ほとんど毎日」36 名(21.2%)、「週 1 回以上」54 名(31.8%)、それ以外 73 名(42.9%)、「ほとんどない」7 名(4.1%)であった。祖父母がもつ孫の総数は、平均 3.62 人であった。

祖父母の気分状態(POMS 短縮版)の平均得点は、緊張－不安は 4.23、抑うつ－落込みは 2.51、怒り－敵意は 3.26、活気は 7.52、疲労は 4.24、混乱は 4.75 であった。幼児の社会的スキルの評定を行った担当教諭は 14 名であった。年齢は 20～25 歳が 4 名、26～30 歳が 3 名、31～35 歳が 2 名、41～45 歳が 1 名、46～50 歳が 2 名、51～55 歳が 1 名、無記入が 1 名であった。平均保育経験は 11 年目であった。

研究課題 1

研究課題 1 では、幼児の社会的スキルと家族との関連について、幼児の社会的スキル尺度と家族機能測定尺度 (FACES-III) を用いて調査が行われている。家族の凝集性と適応性が高い、つまり家族のまとまり具合と役割分担が高いと、幼児の社会的スキルが高くなり、問題行動が減少する傾向を認めた。家族機能のバランスがよい「バランス群の家族」の幼児は、他の群よりも主張スキルが高いことが示唆された。

研究課題 2

研究課題 2 では、幼児の社会的スキルと祖父母との関連について調査されている。祖父母の同居の有無といった居住形態よりも、祖父母が両親の家を訪れ孫の子育てをする「支援の頻度」が祖父母と孫の双方に影響を与える結果が証明されている。祖父母による孫への子育て支援は、祖父母の気分状態、孫の社会的スキル双方に影響を与え、孫の性別によっても、その影響は異なることが示唆されている。特に、男児を孫に持つ祖父母は子育て支援頻度の高群の方が低群より祖父母の活気 (POMS 短縮版の得点) が高かった。女兒を孫に持つ祖父母の気分状態は子育て支援の頻度との関連はみられなかった。祖父母の子育て支援の頻度の高群の女兒は低群の女兒より自己統制スキルが高かった。

家族の凝集性や適応性が幼児の社会的スキルに影響し、祖父母の「支援の頻度」は幼児の社会的スキルの発達のみならず、祖父母自身の気分状態にも影響を与えている結果を研究は示していた。

【論文審査の結果の要旨】

研究者は日本における幼児の社会的スキル発達に関する文献を総説した上で、これまで行われていない領域である家族環境と祖父母と孫の関係性に研究を焦点化させ、指導教員の下で研究計画を立て倫理的側面も十分に配慮した上で調査研究を開始している点から、研究デザインや研究の方法論には問題はないと判断した。

実際の研究では信頼性と妥当性が検証されている「標準化された量的尺度」である①幼児の社会的スキル尺度、②気分評価尺度-POMS 短縮版、③家族機能測定尺度—FACES—IIIを活用しており、統計解析に関しては、指導教員と統計学を専門とする教員の指導のもとでデータ検証が施行されている。

研究課題1では、家族機能（凝集性と適応性）が子どもの社会的スキルに与える影響を導き出している。「家族のまとまり具合と役割分担が高いと幼児の社会的スキルは高くなり、問題行動が減少する傾向を認めた」という結果は、子どもの社会的スキル発達は母子関係のみならず、家族システム全体の影響を受けることを実証しており、子どもの発達と家族研究の領域において新しい知見であることを審査者三人が認めた。

研究課題2の「祖父母の子育て支援と孫の社会的スキルの発達および祖父母の精神的健康(気分状態)との関連」は、学会誌「比較文化研究」の第113号 p.263～272に原著論文として掲載されたものである。これは、祖父母と孫の相互作用に関する斬新な研究内容が評価されたものと考えられ、審査者三人も納得するところである。特に祖父母は男児との関わりにおいて活動（POMS 得点）が高まる、祖父母の関わり頻度が高いと女児の自己統制スキル（幼児の社会的スキル得点）が高いという結果は、今後の少子高齢社会における「家族の在り方」を理解していく上で重要なポイントになる。

論文審査および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が博士（保健福祉学）の学位に十分値するものであると判断した。